

<今回>273回目 2020年1月17日(金)15時~18時 603号室

読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p134 百済の武寧王碑 より

<前回>272回目(19-12-23) 出席者 10名

資料(19-12-23-1)前回のまとめ(清水)

A 報告 令和元年最後の読書会になりました。みなさまありがとうございました。反切について反を止めて切にしたのは、謀叛の叛で半分の意味もある。仲間割れの反乱とは少し違うという。

懇親会9名 津多屋14509円(2000・7+1500・2) +2401円

C 読書 p125 奄に父兄を喪う

1) 奄は「ともに」、または「にわかに」、の読みがあるがどちらも時間の経過がわずかという意味では同じであろう。どちらも急に父と兄とをいっぺんに失ったという意味。大軍事行動に出る直前に、またはその最中に父兄を喪ったという。平穩裏の死ではなく、思わざる敗戦や海上での難破など一挙に、不意に不慮の死をとげた感が深い。

2) 記紀ともに父兄共に死んだ例はない。臣が亡考済の父兄(仁徳、履中、反正)と解釈しても変わらない。

3) 説話の虚実 戦後の古代史学会は記紀の説話は編者の造作の上に成立しているからこれだけでは史実として扱えない。中国史書や金石資料の裏付けが必要であるとしていた。(戦後史学の出発点)

4) 井上光貞は紀の帝紀的部分と中国の記録は系図としてよくあう。(済、興、武と允恭、安康、雄略)だからこの辺の帝紀的部分は信用できるとして倭王が誰であるか論じたのは意味があるとした。説話は全く食い違っているがよく合うと言っているのは允恭、安康、雄略の3者の系図関係だけである。旧辞部分があっても帝紀部分があっていれば良いというのが井上論だ。それは戦後史学の到達点を確認した上で、古田は旧辞が倭王武の上表文の内容と全く180度異なることを敢えて示した。

5) 六代の平和 倭王武の上表文は著者沈約が38歳の時の事件。古事記には百済系の資料がないので、そこからまず比較検討する。

①中国への貢献と授号の記事 仁徳から雄略まで6代の間には中国との関連記事は1件のみ。「又河瀬の舎人を定めたまいき、此の時呉人参り渡り来其の呉人を呉原におきたまいき、故其の地を呉原という」(雄略記)

②高句麗との戦いの記事は絶無。朝鮮関係唯一の記事は「此の時新良の国王御調81艘を貢進りき、(允恭記)不面目な記事は省いたのだろうかというが目弱王に寝首を搔かれたのは不面目ではないのだろうか。

6) 日本書紀の場合 ①神功皇后39年魏志に云く明帝景初3年6月倭の女王大夫難升米云々②同40年魏志に云く正始元年 中国から詔書印綬を持って来倭③43年魏志に云く正始4年倭王上献④66年是歳晋武帝の泰初2年なり、晋起居注に云く武帝の泰初2年倭の女王訳を重ねて貢献すという。この4項は紀編者によるもので、卑弥呼と壹与の2人を1人かのように神功紀に引用している。しかも本文でなくて。

7) 編者は卑弥呼を知っていて実名を出さずあえてしかも神功その人であるかのように思わせたい技巧がある。(関和彦の書紀編者の歴史観の1断面 神功紀文中魏志の検討を通しての故意隠蔽説を主張)神功紀を卑弥呼に時代設定することにより、紀の時代設定が歪んでくるのも承知の上で、編者達はしていた。(何故か。)

次回日程 20-1-31(金) 15時から18時 601号室

-2-14(金) 16時から18時 601号室

-3-28(金) 15時から18時 601号室